
不条理

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不条理

【Nコード】
N9070S

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
都内で起こる異様な殺人事件その犯人は誰か。そして犯罪を犯す理由は。現代によるあるようなお話を書かせてもらいました。都会ものです。

第一章

不条理

東京ではだ。嫌な事件が続いていた。

「今度もか」

「はい」

「またです」

「また起こりました」

制服の警官達だが。トレンチコートの初老の男に話していた。男は細長い顔をしていてやや猫背であるが背は高い。鋭い光を放つ目を持っており髪は白いものが混ざっている。口がややおちよぼに見える小さいものだが引き締まったものだ。

彼の名を中村真という。警視庁の警視だ。現場で刑事をしている。その彼にだ。制服の警官達が言ってきた。

「それで警視」

「これはやっぱり」

「あれですかね」

「同じ犯人ですかね」

「そうだろうな」

中村はその犠牲者の亡骸を見て答えた。夜の街は寒い。しかし彼の周りはパトカーの赤いサイレンが光り警官達の熱気が立ち込めている。息は白いが冷たいものではない。

遠くに赤や青のネオンが見える。しかし彼が見ているはその光ではなかった。目の前にある無惨な若い女の亡骸だったのだ。

酷い有様だった。

「ゴミ箱に放り込んでですからね」

「強姦した後には首を絞めて殺して」

「その亡骸を全裸にして汚物や動物の排泄物といっしょくたにして放置する」

「こんな普通しませんよね」

「こないかれたやり方は」

「そうだ、こんなことをする奴はだ」

中村は険しい顔で言った。

「そうはいない」

「じゃあ犯人は一体」

「誰なんでしょうか」

「こんなことをする奴は」

「調べる必要があるな」

ここです。中村は考える顔をして述べたのだった。

「大体こうしたことをする奴はだ」

「はい」

「どんな奴でしょうか」

「前科がある場合が多い」

「そうだというのだった。」

「強姦で捕まった奴は再犯を行う可能性が高いな」

「そうですね。それはですね」

「確かに」

「変質的であればあるだけだ」

中村はこのことを熟知していた。これまでの刑事としての人生でだ。そのことを知ってきて捜査してきたからだ。だからである。

「それでだ」

「ではここはですね」

「過去の強姦事件の犯人を洗いますか」

「それもおかしそうな奴を」

「そうしますか」

「そうだ、そうする」

こう言う中村だった。そうしてであった。

彼は部下達と共にすぐに強姦による犯人達を調べだした。それは一人ずつでありかなり時間のかかるものだった。しかしであった。

少しずつだ。犯人が絞られてきたのだった。その中でだ。

「こいつ怪しいですよ」

「それもかなり」

「こいつは」

「そうだな」

中村は部下達が出してきたその過去の犯人のデータを見て話すのだった。そのデータに載っているのはであった。

「麻倉元保か」

「はい、こいつです」

「過去に強姦事件で三回捕まっています」

「この男です」

やけに目つきが悪く傲慢そうな表情の男の写真がそこにあった。普通にしていれば温厚そうな顔立ちなのだが目つきと表情からだ。そうになっていた。額はやや広くなろうとしておりデータにある背は一七八とあった。

「年齢は三十一ですね」

「職業は歯科医とのことですが」

「今は日雇いで働いています」

「この男のことですが」

「とんでもない奴だな」

中村はその朝倉の過去の犯罪に関するデータを見て言うのだった。

第二章

「強姦した相手に小便をかけたりな」

「はい、排泄物を食わせたりです」

「縛ってドブの中に捨てたりしています」

「これは」

「そのままだな」

中村はここで言い切った。

「怪しいなんてものじゃない」

「初犯の奴の可能性もありますが」

「それでもこいつはですね」

「やっぱり怪しいですよね」

「それもかなり」

「見込み捜査は危険だが」

中村はこのこともわかっていた。これも長年捜査にたずさわってきてわかることだった。その危険は刑事である彼が一番わかっていた。

だが、だった。今度はだ。その刑事の直感でこの男だと確信したのだ。

それでだった。部下達に言うのだった。

「こいつは今何処にいる」

「安アパートに住んでいます」

「都内、墨田の方です」

「そこにです」

「わかった。それでだが」

ここであった。中村は部下達にこうも話すのだった。

「その過去の事件の麻倉から手に入れた体液とだ」

「今回の一連の強姦殺人事件での犯人の体液ですね」

「その照合ですね」

「それも頼む」

念を入れてだ。それも言うのだった。

「わかったな」

「はい、それはです」

「既に鑑識が出そうとしています」

「もうすぐわかります」

「そうか。それは何よりだ」

それを聞いて無表情に頷く彼だった。そしてその結果はだ。

「一致しました」

「ほぼ間違いないとのことですよ」

「麻倉のものです」

「血液型だけでなくです」

当然ながらそれも調べてのことだった。

「遺体に付着していた指紋もでした」

「全て麻倉のものです」

「何もかもが一致ですよ」

「状況証拠は」

「揃ったな」

中村はこのことも確信したのだった。内心外堀を完全に埋めた気持ちになった。

「これでな」

「はい、それではですね」

「いよいよあいつを捕まえましょう」

「今から」

「行くぞ」

実際にだ。彼はここで立ち上がったのだった。

そしてそのうえでだった。麻倉のアパートに向かう。そこでだった。

部下達と共にそこに向かってだった。チャイムを鳴らすとだ。すぐに麻倉が出て来た。やはり背が高く嫌な顔つきをしている。

顔色は悪く肌も荒れている。目も濁り異様なものがそこにある。

そして安物のオーデコロンの香りをさせながらだ。中村の前に出て来てそれで言うのだった。

「何だよ、見つかったのかよ」

「御前が一連の事件の犯人だな」

「だったらどうするんだ？」

悪びれず中村にその言葉を返す彼だった。そう言いながらそのうえでだった。懐から煙草とジッポライターを取り出した。火を点けてからまた話すのだった。

第三章

「逮捕するのか？」

「そうだ、麻倉元保」

中村は彼のその名前を呼んでだった。逮捕令状を彼に見せた。

「御前を連続強姦事件の重要参考人としてだ」

「重要参考人じゃないだろ」

しかしだった。彼は悪びれないまま平然としてこう返してきた。

「そこはな」

「何っ、どういうことだ」

「何が言いたい」

「犯人だろ？」

こう言うのであった。

「俺がやったさ。証拠もあるだろうが」

「貴様、まさか」

「本当に」

制服の警官達がいぶかしんでいるとだった。彼はまた言うのだった。

「歌舞伎町に鶯谷だったか」

「その二つでだと」

「貴様、まさか」

「またやったのか」

「今頃誰かが見つけて噂になってるな。昨日は二人だったからな」

「話は聞いた」

中村は表情を変えずに彼に告げた。

「では詳しい話はだ」

「署でっていうんだな」

「そうだ、来い」

こうしてだった。麻倉は警察に連れて行かれそのうえであらため

て取調べを受けたのだった。その結果だった。

彼の自供通りその歌舞伎町と鶯谷でも発見され大騒ぎになっていた。やはり汚物の中に埋められるようにして捨てられた無惨な屍がそこにあった。

そしてだ。取調べの中で彼は話すのだった。

「どうして殺したかってか」

「そうだ。何故だ」

中村は彼の取り調べも行っていた。その中で問うのだった。

「何故彼女達を殺した」

「別に」

麻倉は悪びれずにこう返してきた。

「何も理由はな」

「ないというのか」

「そうさ、ないさ」

これが麻倉の言葉だった。

「全くな」

「おい、ふざけるな」

「そうだ、ふざけるな」

周りの制服の警官達が彼の今の言葉に激昂して問い積める・

「理由もなくて人を殺すか」

「それもあんなやり方でな」

「まああるとすればな」

どうかというのだった。

「あれだ。殺したかったからな」

「そんな理由で人を殺すのか」

「貴様は。あんなやり方で」

「おかしいか？人間死んだら同じだろ」

今度はこう言う彼だった。

「所詮な」

「一緒なものか」

「そんな筈があるか」

「犯して殺してゴミ箱に捨てるのか」

「それもそうだったからか」

「そうさ。他に理由なんてないさ」

全く悪びれた様子はない。反省の色なぞ全く見られない。

そしてだった。彼はその言葉を続けるのだった。

「俺は犯したいから犯して殺したいから殺すのさ」

「貴様……」

「ふざけるなよ」

「五人も殺しておいて」

「そう言うのか」

警官達は今にも掴みかからんばかりだった。しかしだ。

ここで中村がだ。彼等を制して言うのだった。

第四章

「落ち着け」

「ですが警視」

「それでもこの男はです」

「許せません」

「人間として」

「だが今は取り調べ中だ」

彼とて内心憤っていた。しかしそれでも何とか自制してだ。部下達に言ったのだ。

そしてであった。彼は麻倉に対して問うのだった。

「それえはだ」

「ああ、何だ？」

「罪を認めるんだな」

問うのはこのことだった。

「それはな」

「ああ、認めるさ」

やはり平然として答える彼だった。

「全部俺がやったぜ」

「わかった。それではな」

取調べ自体はすぐに終わった。麻倉はすぐに裁判にかけられそうしてそのうえで死刑判決を受けた。実に迅速に終わった。

世間はこの猟奇的な事件におどましさを感じネットでもマスコミでもスクープになった。だがその裏でだった。

捜査と取調べを行った警官達はだ。苦い顔をしてこう話をするのだった。

「あいつ、一体何だったんだ」

「理由もなくあんなことをしたのか」

「いや、理由はあったぞ」

警官の一人が言った。

「それはちゃんとね」

「殺したいからか」

「そんなのが理由になるのか」

「それだと何をしてても許されるだろ」

「無茶苦茶な話だ」

「そうだ、そんなのはだ」

そしてだった。この言葉が出て来たのだった。

「不条理だ」

「不条理か」

「あれは」

「そうだな」

そしてだった。これまで話を聞いていた中村がだ。口を開いたのだった。

「あれは不条理な事件だ」

「それで人が殺されるとは」

「何か話がわかりません」

「全くだ」

「そうだ、訳がわからなく滅茶苦茶な話だ」

それは中村も言う。

「理屈に合わないな」

「けれどそれでもなんですね」

「事件が起こってあんなった」

「それは事実ですね」

「事実が事実だ」

また話す中村だった。

「世間は何でも理屈やそれで説明がつく訳ではないのだ」

「ああしたこともですか」

「あるっていうんですね」

「つまりは」

「そういうことだ。俺もそうした事件は話には聞いていた」
こう話すのだった。

「しかしだ。実際に見たのははじめてだ」

「そうだったんですか」

「警視もああした事件はですか」

「でしたか」

「だが。これで実際に見てわかった」

そうだったというのである。

「ああした人間がいてああした事件が起こる」

「それも世の中なんですね」

「そうなんですね」

「そうだ、訳のわからない事件もある」

また言う中村だった。

「理由も何もかもが滅茶苦茶な事件もな」

「酷い話ですね」

「全く」

「そうして殺された人間もいるなんて」

「有り得ないですよ」

こう話してだった。そしてそのうえでだった。彼等は納得いかないままこの事件についての全てを終えたのだった。それは麻倉が絞首刑になってもだった。誰も納得しないままだ。事件は終わったのだった。

不条理 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9070s/>

不条理

2011年5月1日22時11分発行